様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月 ２６ 日現在

機関番号：１３２０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2020
課題番号：１７Ｋ０２２０４

研究課題名（和文）東アジア近代における思想的伝統の創造に関する研究

研究課題名（英文）Study about creation of thinking tradition in modern East Asia

研究代表者
末岡　宏（Sueoka, Hiroshi）

富山大学・学術研究部人文科学系・教授

研究者番号：１０２５２４０４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では主に近代の日本・中国・朝鮮各国において自国固有の文化・学術に対して用いられた国学の様相を明らかにし、その上で相互に関連があるのかを考察することを目的とした。研究の結果、日本の国学が用例として一番早いが、日本の国学は他の二国に直接の影響はなかった。中国の国学は日本の明治中期の国粋主義に刺激を受け、中国の伝統的学術を西洋文明に対置するものとすることで成立している。朝鮮の国学は、西洋文明に対抗してハングルによって記述される朝鮮独自の学術の呼称として成立している。以上のことが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
研究の過程で作成した日本・中国・朝鮮の論文データベースを公開することにより、本研究班のメンバーのみならず今後国学の研究に資することになる。
日中朝三国は同じ「国学」という言葉でも、その成立した経緯、歴史的背景、その内容が全く異なっていることが判明した。今後「国学」を研究するにあたっては安易に比較すべきではなく、西洋文明との関係を念頭に置き著作等を個別に詳細に考察する必要がある。研究の結果、日中韓三国は自国の伝統文化に対する認識、評価の基準が全く異なっていることが判明したが、この違いは三国の歴史認識の違いにつながっており、国交関係にまで影響を及ぼしており、相互の違いを理解する必要がある。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to clarify the aspects of Kokugaku used in modern Japan, China, and Korea in relation to the culture and science unique to their countries, and then to examine whether there were any interrelationships. As a result of my research, I found that Japan's Kokugaku was the earliest example of its use, but that it had no direct influence on the other two countries. China's Kokugaku was stimulated by the nationalism of Shigeki Shiga and others in the mid-Meiji period in Japan, and was established by making traditional Chinese scholarship a counterweight to Western civilization. Korea's Kokugaku was established as a name for Korea 's unique academic discipline described in Hangul, in opposition to Western civilization. The above points have been clarified.

研究分野：中国哲学・思想

キーワード：東洋・日本思想史　国学　国粋主義　日本　中国　朝鮮

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

(1)　中国、日本、朝鮮はともに近代以降、伝統的学術を「国学」と呼んでいるが、実際の「国学」の実態は大きく異なったものである。日本では「国学」とは近代以前から中国の伝統学術「漢学」に対応する日本固有の学術を指す。中国では日本の明治以降「国学」とは別に欧米化への対抗としてが生まれた「国粋主義」「日本主義」の影響を受けつつ中国伝統の学術を指すものとして生まれている。朝鮮の国学は西洋化への反発を背景として、朝鮮独自の学術を指すものとして成立している。しかし従来の研究において、なぜ相互の影響がありながらこのように全く異なった形態をとるかという点については依然として解明されていない。

(2)　中国での国学については中国では多数研究があるものの、「国学」草創期における「国学」と他の諸国の「国学」の関係は考察していない。また日本では中国国学の日本からの影響について言及しているが具体的な影響は明らかになっていない。

(3)　日本の国学については近代の国学も一部明らかになっているが、明治期の国学の特質については明らかになっていない。また、従来「国学」とは別のものと捉えられている三宅雪嶺・志賀重昂らの「国粋主義」、陸羯南の「日本主義」、徳富蘇峰の「国民主義」は中国の国学形成に大きな影響を与えており、その関係を解明する必要がある。更に「国粋主義」と同時期に日本で草創された中国学（支那学）研究者が中国の「国学」をどのように捉えたかを研究することで、日本で「国学」がどのように捉えられてきたかを伺うことができる。

(4)　朝鮮における国学はハングルによって記述される朝鮮独自の学術として捉えられているが、その契機について近代における西洋化によって始まったとする説があるが、朝鮮において中国の国学及び日本の国学との影響関係については明らかになっていない。

２．研究の目的

(1)　本研究は、近代東アジアの中国・日本・朝鮮において欧米の学術・文化の受容に伴って変容した中国・日本・朝鮮の知的枠組みの中で、欧米の学術に対抗して自国の伝統的学術を強調する学術は、伝統的な学術・文化を再定義・再構築したものであり、伝統の創造といえる。そして、この伝統的学術が相互に関係しあいながら学術の伝統がいかに創造されたかを解明することを主な目的とする。西洋の学術に対峙するものとして東アジアの伝統的学術が変容し再構築されていく過程を、「結節」「連鎖」の観点から解明することにより、また各国の伝統的学術及び西洋化に関する専門知識を持つ研究者が緊密に連携して実証的かつ複合的な研究を進めることで、近代東アジアの知の枠組みの改変について新しい枠組みを構築することを目的とする。

(2)　特に近代の中国・日本・朝鮮等の東アジア諸国における「国学」について、欧米の学術・文化の受容に伴う、伝統学術の変容・再構築という観点から「国学」が相互にどのように影響したかを研究し、日本、朝鮮、中国の国学の特徴を明らかにする。その結果、欧米の学術・文化を受容する過程で大きく変化した中国・日本・朝鮮の知的枠組みの中で、伝統的な学術・文化を「国学」として再定義・再構築する過程を比較・検討することを主な目的とする。更に中国・日本・朝鮮の「国学」の形成過程の相互の影響及び共通点・相違点を考察することにより、近代東アジアの学術の「近代化」の背景の伝統的な知的枠組み及び「儒教」の特質を明らかにすることを目的とする。

３．研究の方法

(1)　中国の国学については研究代表者末岡が、日本の国学については田畑が、朝鮮の国学については鈴木が、中国・朝鮮・日本の国学成立以前の「儒教」については中及び研究協力者川原が資料の収集・分析を担当する。また研究者が既に所持している資料を補うため、各国の資料を収集するほか現地に赴いて文献を調査・収集する。研究に進めるに当たって、中国・日本・韓国の国学研究について電子ファイルでデータを作成・保存し、これらの資料をもとに相互に緊密な連携をとりながら研究を進める。またこのデータはデータベースとして公開する。東アジア三国の国学については研究代表者及び研究分担者が既に研究を進めており、先行研究を利用しつつ本研究のねらいに沿った形での資料を収集し分析する。収集する資料は、市販の書籍等が主であるが、併せて日本・中国・台湾・韓国の研究機関に所蔵される資料を調査し収集する。

(2)　主要な研究成果は学会で報告するとともに論文を作成し、また WEB で公開する。

４．研究成果

(1)　国学とは主に近代の日本・中国・朝鮮において自国固有の文化・学術に対して用いられた呼称である。本研究では各国の国学の様相を明らかにし、その上で相互に関連があるのかを考察することを目的とした。研究の結果、日本の国学が用例として一番早いが、日本の国学は他の二国への直接の影響はなかった。しかし、近代の国学は西洋文明の急速な導入（欧米化）によって自国の文化的伝統が失われることへの危機感が根底にあり、西洋化・西洋文明への対抗が背景にある。中国の国学は日本の明治中期志賀重昂らの国粋主義に刺激を受け、中国の伝統的学術を欧米の文明に対抗するものとすることで成立している。朝鮮の国学は、欧米・中国・

日本の影響を受けない、朝鮮固有のそして記述言語もハングルのものの呼称として成立している。
(2)　日本においては、江戸時代中期本居宣長らにより儒教・仏教伝来以前の日本古来の学術を研究するものとして成立し、幕末には平田篤胤らにより幕末の尊王攘夷思想の思想的根拠となったものである。明治維新後は「考証学派」を中心に学問としての国学の系譜は残り一定の影響は保ったものの、イデオロギー的な影響力を失ってしまう。それとは別に明治中期になると、政府の欧化主義に対する反発から、志賀重昂ら国粋主義を主張するようになる。また東京大学において古典講習科の設置がある。古典講習科は国学と漢学を教えたが、井上哲次郎の江戸儒学三部作とそれを引き継いだ蟹江義丸の研究など、この時代の「国粋」は旧来の国学だけではなく漢学も含んだものとなっている。
(3)　中国においては「国学」は 1905 年前後に『國粹學報』を中心として始まったものである。その契機は日本の志賀重昂の国粋主義運動である。中国においては挙学としての朱子学を除いた中国伝統の学術、その中でも宋学成立以前の経学に、諸子学、仏学を含めたものを総称して国学と称するようになる。更に五四運動以降胡適等の主張した国故整理運動とも合流して成立したものである。つまり中国の「国学」は既存の伝統的学術を再編した「伝統の創造」の側面を持っているものである。
(4)　朝鮮における国学はハングルによって記述される朝鮮独自の学術として捉えられている。その契機は近代における西洋化によって始まったとする説と日本の影響を受けて「朝鮮学」という形で成立したという説が併存しているが、いずれも中国の国学との関係は論じられておらず、日本の国学との関係も詳細には論じられていない。しかし現在はその契機はおいて国学はハングルによって記述される朝鮮独自の学術として定着している。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 中純夫	４．巻 21
２．論文標題 洪大容の対外認識について ： その中国体験に即して	５．発行年 2019年
３．雑誌名 洛北史学	６．最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 川原秀城	４．巻 251
２．論文標題 朝鮮実学 ： 東西学説の融合と李退渓の規範	５．発行年 2019年
３．雑誌名 朝鮮学報	６．最初と最後の頁 1-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 末岡宏	４．巻 70
２．論文標題 蟹江義丸について	５．発行年 2019年
３．雑誌名 富山大学人文学部紀要	６．最初と最後の頁 63-85
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	鈴木　信昭 (suzuki Nobuaki) (50206512)	富山大学・学術研究部人文科学系・教授 (13201)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	中　純夫 (Naka Sumio) (50207700)	京都府立大学・文学部・教授 (24302)	
研究分担者	田畑　真美 (Tabata Mami) (80303197)	富山大学・学術研究部人文科学系・教授 (13201)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関